# 学 位 論 文 審 査 の 要 旨

| | | 要　　旨 |
|---|---|---|
| 学位申請者 | 武田（六角）洋子【博士】<br>【人間発達科学専攻　平成12年度生】<br>（平成18年3月31日　単位修得退学） | 本研究は、子育て支援における親教育プログラムを、保育者と心理職が協働して実践した事例をもとに、①保育者と心理職の協働によりどのような親支援が可能となるのか、②またその協働の体験は、両者にとってどのような意味をもたらすかについて、６つの調査をもとに検討したものである。<br>本研究から得られた主要な知見と意義は、次の２点である。<br>第一は、生後3歳までの子育てを家庭で行う親たちに、親子教室を実践し、特に親の教育プログラムの効果を具体的に検証したことである。親が自ら子育てについて学ぶ体験を継続的に持つことは、親としての自己肯定感を高め、安定した子育てを可能とするのに効果があると共に、子育てに自信がなく、自己肯定感が低いために、心理的な援助を必要とする親に対しても、保育者と心理職が共に関わることで、一定の効果が見いだされた。こうしたことから、子育て中に起こる様々な問題に対する予防的な意義があると示唆された。<br>第二は、保育者と心理職が協働して、子育て支援を行う体験は、実際の子育て支援の実践が一つの専門性で行われる支援よりも豊かになるととらえていることがわかった。例えば保育者は、心理職の専門性を学び、自らの保育の技量を向上させることができると認識していた。一方、協働経験の少ない一般保育所の保育者は、心理職を保育者と対等な関係とはとらえず、自らのバーンアウトの救済者あるいは、指導者として依存的にとらえていることが見出された。<br>以上のことは、今後の子育て支援現場での保育者と心理職の対等な協働が可能であること、またそれによって、良質な支援が実現する可能性を、実践と調査の結果を踏まえて具体的に示したものとして、評価された。<br><br>本論文の審査は、平成29年8月1日、平成29年10月13日、平成30年1月19日、平成30年2月15日の4回にわたって行われた。第１回審査会では、主に子育て支援における臨床心理学と保育学の双方の見地を統合していく課題が指摘された。そこから論文の構成を大きく見直すことが必要となり、修正が加えられた。第3回の審査会までの過程で、要請された修正事項が十分推敲され、完成度が高められた。平成30年2月15日の公開審査会での発表は、配布資料などもわかりやすく論旨も明快であり、フロアからの質問にも適切に応答がなされていた。<br>以上の結果より、本審査委員会は、全員一致で本論文が博士(人文科学)、Ph. D. In Psychology にふさわしいと判断し、合格とした。 |
| 論 文 題 目 | 保育者と心理職の協働による親支援 ―親教育を主軸に据えた実践から― | |
| 審 査 委 員 | （主査）　准教授　青木　紀久代 | |
| | 教授　浜口順子 | |
| | 准教授　伊藤　亜矢子 | |
| | 教授　小玉　亮子 | |
| | 准教授　刑部　育子 | |
| インターネット公表 | ○　学位論文の全文公表の可否（　可　・　㊟　） | |
| | ○　「否」の場合の理由<br>ア．当該論文に立体形状による表現を含む<br>イ．著作権や個人情報に係る制約がある<br>㋒．出版刊行されている、もしくは予定されている<br>エ．学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている<br>オ．特許の申請がある、もしくは予定されている | |
| | ※　本学学位規則第２２条第４項に基づく学位論文全文のインターネット公表について | |